

ここにこの人——福井産地から

織りネーム業界に新しい風を

織りネーム生産日本一の町、福井県丸岡町。メーカー商品の織りネームや織りテープの約70%がここ丸岡町で作られている。㈱松川レピヤンは、その丸岡町で90年近くにわたって織りネームの生産に携わってきた。手織りから始まって現在の最新レピア織機と電子ジャカードまで、織りネーム生産の歴史はそのまま同社の発展と重なる。現在、同社では各種織りネームをベースにさまざまなオリジナル製品を開発・販売しており、それらは今や同社の生産量の30%を占めるに至る。今回は、同社松川敏雄社長にお話を伺った。

営業力とアイデアで市場に切り込む

松川敏雄社長が、大正14年(1925)、祖父によって創業された同社を2代目の父親から引き継いだのは昭和53年(1978)。22歳の時だった。3代目代表として会社の運営を任されたものの、経営状態は決して楽ではなかった。それまで仕事の注文は「待ち」が当然とされていたこの業界で同社も例外ではなく、問屋の数が極端に少ないせいもあったが、他の業者に比べ設備が十分ではなかったために注文はなかなか来なかった。



松川敏雄社長

「待つだけではダメだ」と背水の陣を敷き、「待ち」から「攻め」へと大きく舵を切った松川代表は、取引先の本店・支店を、東京・名古屋・大阪・広島へと注文取りに奔走した。旧来の固定概念から脱することが立て直しの第一歩だとして。

そんな中、「うちくらいの規模で他と同じものを作っているは生き残れない。価格競争に甘んじていたら明日はない」と、他社との違いを創り出す必要性を痛感、そのためには独自のアイデアを売りに結びつけることだと考えた。幸い、営業先での会話の中にアイデアの種はいくらでもころがっている。それを拾い上げ、製品化して営業先へ提案した。もともとアイデアを考えるのが好きだったこともあり、新しいアイデアは次々に浮かんだ。新たな路線に確かな手応えを得た。

こうして平成元年(1989)、株式会社松川レピヤンを設立。松川代表は代表取締役社長に就任した。

他社に先駆け、大胆な設備革新を実現

社長就任の5年前、昭和59年(1984)にドイツ・パーベル社製のレピア織機を導入したことは、同社のその後の成長を方向づけたと言える。松川社長は就任早々、大胆な設備革新を次々と実現していく。まず日本初の電子ジャカード搭載レピア織機(緯糸12色機)を導入、併せてデザインシステムも導入した。

さらにその3年後、日本初、ダブル幅用電子ジャカード搭載織機の導入を機に第2工場を新設。以後今日に至るまで、高速レーザーカット機、ロックミシン、新型レピア織機、最新エアジェット織機など次々と積極的な設備革新を図って生産の質と量の大幅アップを実現してきた。



㈱松川レピヤン第2工場

注目の技術——「織り」によるバーコード

見る人、使う人の気持ちに寄り添う、懐かしく美しく、そして新しい——そんな織物づくりをモットーに、同社では現在越前織のさまざまな製品を生産。ネット直販も展開している。(※)

例えばジャカード機で織った美しいウエルカムボード、ギフトにも喜ばれるオリジナルブックカバー、ノベルティやお土産にも効果的な携帯クリーナー、高級感のある各種ストラップ。楽しいデコワッペン、織物の糸に香り成分を配合したゆかしい香り袋、注文先の条件やニーズに柔軟に対応できるセミオーダーのお守り袋、織物でつくるポストカードや名刺等々。

特に注目されるのは5年前に同社が開発した、織りによるQRコード。細かい模様を鮮明に表現するだけでなく、経年的に模様の形状が変化することのない製造方法を実現した。続いて昨年春、バーコードのナンバリングネームを開発。ユニフォームレンタル会社からの受注で、レンタル用ユニフォームの一枚一枚を特定できるバーコードの織りネームを生産している。洗濯頻度の高いユニフォームなどの場合、プリントでは色落ちて判読できなくなるという問題を織物で解決した。



株式会社 松川レピヤン

福井県坂井市丸岡町

代表取締役 松川敏雄 氏



(※)越前織とは——「越前織」の名前が産地の統一ブランドとして正式にデビューしたのは平成18年(2006)。旧来の細幅織物のイメージから脱却し、より高度な美術工芸品はじめ多様な新製品を総称するブランド名として全国にその名を発信している。高級感のあるきめ細かい風合いが特長で、産地ではこの「越前織」を今後大いにアピールしたいとしている。

自社一貫生産体制と、品質への信頼を強みに

同社では企画・デザイン、製織、裁断から縫製に至るまで自社で一貫生産ができる。ますます厳しく求められる多品種、小ロット、短納期に対応するには大きな強みだ。

そしてもう一つ、同社が大切に、強みにもしているのが厳しい品質管理で培った信用である。検品作業には手間を惜しまない。そのための人材を増やしたことで人件費はこれまで以上にかかるようになったが、取り引き先の信頼を繋ぎ止めるためには不可欠だという。厳しい指導の下、徹底した検品作業を行う社員は、自社製品の品質に自信と誇りを持っている。



「出る杭は伸ばせ」をモットーに

最近、社員の若返りを図った。業界では老舗ながら今では平均年齢36歳の若さ溢れる企業となっている。「最近の若い者は責任を持ちたがらない」とよく言われるが、同社では若手社員が入ると東京ビッグサイトでの展示会出展を担当させ、展示会に向けて企画からすべてを彼等に任せる。松川社長はその狙いを「業界を知り、来場者の反応を知り、自社の能力を客観的に知ることができるし、一つの目標に向かって共に取り組む体験をするいい機会にもなっている。」

「日本一短い手紙」と越前織り

「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」。これは丸岡町にゆかりのある徳川家康の忠臣、本多作左衛門重次が陣中から妻にあてて送った手紙で、この手紙文を刻んだ碑が日本で最も古い天守閣をもつ丸岡城に建っている。これにちなみ丸岡町主催で平成5年(1993)から始まったのが「日本一短い手紙コンテスト」。応募作品の本が次々と出版されてベストセラーになると共に、丸岡町の名前は一気に知られるところとなった。町ではこのブームを越前織りと結び付け、越前織の製品を次々と発表、応募作品のイメージイラストを織物で表現するなどして、越前織のPRに力を入れている。

口で言うよりも、体験していくプロセスの方がずっと効果的」と話す。「出る杭はほとんど伸ばせ」がモットーの元気な個性派集団、その成長がやがて同社の財産になることだろう。



㈱松川レピヤン本社工場



今年三男も入社して、晃久さん、享正さん、昌玄さんの息子三人が営業に技術に生産にとそれぞれの得意分野で働くようになった。「次世代が育っていくのは嬉しいのですが、将来の成功も失敗も一蓮托生であり、それだけに4代目となる後継者にしっかりした基盤を手渡せるようにしなければ」と、松川社長。「前進あるのみ」という精力的な営業活動と設備革新、その原動力の一端はそこにあるのかもしれない。

13年後には創業100周年を迎える㈱松川レピヤン。他社の追従を許さない独自の技術で、ナンバーワンのスケールでなくても、オンリーワンの存在感で地元業界にいい刺激を与え続けることが期待される。